〈書評〉

石崎嘉彦『ポストモダンの人間論——歴史終焉時代の知的パラダイムのために』

ナカニシヤ出版、二〇一〇年

松島哲久

はじめに

石崎先生は我が国を代表するレオ・シュトラウス研究の専門家であり、またそのことと関連して、哲学・倫理学的研究を政治哲学の方向性において探求されて来られた哲学者である。その先生が満を持して世に問われたのが本書である。本書は大いに野心的な書である。それは「近代性」そのものの概念を、近代の科学的パラダイムによって生み出された諸価値だけに止まらず、それらがもたらした諸結果としての近代の破産をも内包するものとして、その全面的否認を政治哲学的視点から断定するからである。それは、近代科学主義を超り越えるとするポストモダンも近代のパラダイムの内に入り、その点で、近代はポストモダン的思想においては超り越えられていなくて、テクノロジー支配による現代的形態における僭主政治を現在化する働きのひとつにすぎない。政治的には近代民主主義も、それを支える近代的啓蒙的諸価値も、現代のグローバル化した世界におけるテロリズムおよびニヒリズムと同じ地平にあるとされるのである。一見してこの主張は、近代および現代の諸価値と諸制度の全面的破棄を主張しているように見える。その意味で非常にラディカルで、そしてまた、その否定の先に目指されるものを私たちに予感させるという意味で、野心的な試みなのである。それを、それ程肩肘を張って主張されていないのは、優れて政治哲学的視座から現代を眺望できているからであると考えられる。

透徹した政治的認識と徹底的な哲学的反省的思考とが一体となった政治哲学的眼差しにおいて現代の科学的知とテクノロジーの支配的状況と僭主的政治体制を見れば、最も根源的なとこ

ろからの現代的生の批判がなされなければならないということは明白なことであったと思われるからである。本書はそこからの思惟の展開が徹底してなされている稀有な書である。しかし、まさにそれだからこそ、重大な問題の提起もなされていて、それについての議論の余地は大いに残されていると考える。この論攷の最後に問いとして提起したいが、それは科学的パラダイムから倫理的パラダイムへの転換ということで明らかにされるべき諸価値の内実とその政治的実現についての論及の問題である。提起されるのが倫理であり、徳であり、新しい自然観であり、共生であるとしても、それらを実現する政治体制を政治哲学的視点から明瞭に提起する必要がある。この点については、優れてラディカルな本書の近代批判の内容を辿った後に詳しく検討して行くことにしたい。近代科学の普遍的同質的知に対して「異種混合の知」ということが本書では主張されている。恐らくこのことの意味をより明確に理解する作業が残っている。

一　近代合理性批判：ポストモダン的時代も含むその射程の長さについて

さて本書の特徴は、「近代の終焉」という現代の共通した課題に対して、それを「歴史の終焉」として捉えるところにあり、歴史主義からの脱却が目指される。しかもその歴史主義が一見して普遍主義・論理主義を標榜する近代啓蒙の思想の必然的展開として捉えられている点が重要である。すなわち、本書の第一章にあるように、「近代の合理的思考は二つの相を持っていた。科学を導く合理的思考と歴史的あるいは弁証法的理性に基づく思考という二相である。近代性の中で、科学の合理性と歴史の合理性は、自然を作り変えるという人間の行為によって結びつきを持つことになった（一二頁）」。問題はその近代性を導いてきた合理性がその内的必然性によって非合理なものを生み出したということなのである。この事態が本書では「啓蒙の蒙昧主義への転化」とか、「テクノロジーの支配」、「政治のイデオロギー化」等で言い表されている。そこで失われているのが、人間の卓越性（徳）であり、崇高さであり、気概や節度であると指摘される。すなわち、ギリシャ古典時代の賢慮であり、善き生なのである。しかし問題は、この古典への回帰という問いかけが近代が終焉するところで発せられているということなのである。すなわち著者は、シュトラウスと共に、ポストモダンの地平において、末期的モダンとして未だモダンと決別できていないポストモダン的状況の中で、その状況を決定的に超えて、そこにおいて失われたもろもろの価値を再生させる道筋を政治哲学的に切り開こうと試みている。科学的パラダイムから倫理的パラダイムへの転換の試みである。その倫理は、しかし、単に古典ギリシャの倫理概念によってはけっして捉えきれないと言わなければならない。それでは、近代科学的合理性によってもたらされたニヒリズムの克服という課題に応えきれないであ

ろうからである。いわんやニーチェの時代より徹底して価値が喪失してしまっている現代にあって、その根底にテクノロジーの僭主政治を見据える著者にとって、その倫理性の意味の回復は、近代性の意味を徹底化して把握し批判に晒すことによって、それからの超出を図ることによってのみ可能であるように思われる。

ここで、著者の近代批判の要点をまとめておきたい。近代は「政治学と自然学の二つの領域での視点転換（一三三頁）」によってもたらされる。それは「コスモスの崩壊」と「空間の幾何学化」であり、それによって「空虚にして無限なる幾何学的空間という観念」が成立する。そしてこの観念によってピュシス、秩序そして「自然的場所の観念が破壊された」のである。まさにこの近代の科学革命によってもたらされたものこそ、「人間知の対象から倫理的価値が除外される（一三三頁）」という事態なのである。このような近代的合理性は、「対象を均質化し」、「主体を平準化することによって」、自然、理想、神など「何か超越的なもの」を「知の対象から除外することになった（一七頁）」と指摘される。すなわち「同種的知」であり、普遍同質的知」に他ならない。そのような近代の科学的知は目的としての知ではなく、道具的知へて変質してしまっているのである。近代とは生の意味を問う代わりに、生の手段を追い求め、近代科学技術によってもたらされた力は、その目的を欠くことになる。そこから人間の物象化と目的喪失の世界がもたらされ、やがて僭主としてのテクノロジーの人間支配が始まるのである。このような科学とテクノロジーはその力によって生活世界を欲望の体系へと組み替えていくことになる。著者の近代性批判の要点は、「人間の合理的思考に内在している破壊性（一一八頁）」という点にあり、これが「啓蒙のパラドクス」に他ならない。

二　現代的形態の僭主政治支配批判

現代世界のテクノロジー支配を僭主的支配体制と見る政治哲学的視点から、このテクノロジー支配を根底に据えて、テロリズムをはじめとする現代のあらゆる破壊的政治現象がそこから帰結してくるものと見る見方は、それだけで非常に論争を呼び起こす内容を孕んでいるのであるが、そのテクノロジー批判が近代のヒューマニズム的諸価値への批判と結び付けられるとき、そしてテクノロジー批判が根底的であればあるほどそれだけ、現代における人間性への肯定的価値観に対する強い批判となるが故に、今度は、その肯定的価値観を擁護する立場から強い反論がなされうるし、また当然著者は、そのことを覚悟して、テクノロジー批判を徹底化し強め、その結果、その批判の射程は無限の遠くへと及んでいる。その政治哲学的試みが、たとえばかつてのハイデガーのテクノロジー批判と決定的に違うことが要求されるであろうが、そこに単に哲学的思索というだけに止

まらない具体性を備えた政治哲学的問いかけの思惟の特徴がある。まず問われるのが、なぜ現代テクノロジー支配は僭主政治的支配となっているのかということである。この問いへの論考によって本書で科学とテクノロジーと政治なき政治現象との結び付きが明確に呈示されている。それによって、本書では主題化はされてはいないが、ナチズムと決別できなかったハイデガーの思惟との違いが明らかとされうると思う。

テクノロジーによる現代の僭主的支配について、本書ではそれを、「リヴァイアサンの血統を引き、科学の普遍性と同質性の遺伝子とともに無限の欲望と力への意志を注入されたこの新たな怪物（一三二頁）」というように表現している。これを可能にしたのが近代自然科学と近代政治学の領域で引き起こされた力の概念の転換であり、これによって善という倫理的価値は富という経済的価値および科学それ自身へと転換されるというのが本書の指摘するところである。そのことがデカルト、マキアヴェッリ、ヘーゲル、マルクス等に言及しながら思想史的に考察されている。何が善きものであるかという問いが、本来の道徳性の意味を失って科学と経済的価値へとすり替えられてしまっているというのが、ひとつの結論である。そこで必要とされるのが、人間の共同的生としての政治性の回復である。これによる「近代的思考の枠組みの根底からの脱構築（一三七頁）」こそ著者の目指す方向性である。著者はこのことを人間が共に生きるための原理としての「自然権」とその理論である「政治哲学の復権（ibid.）」と呼び、「節制の徳」を「知性的異種混合性の地平へと回復する（ibid.）」必要性を主張するのである。

三　倫理的パラダイムの再生は可能か：ポストモダンの人間論の可能性

二〇世紀を科学技術優位の時代と捉えることは現代共通の認識であろう。科学知にテクノロジーが結び付いて強力な力を手にした近代の人間が、自然を生命なき機械と見なし自己の支配下に置こうとする欲望のもとに活動してきたという認識もほぼ共通の認識となっているであろう。近代的自然観と人間観である。そしてそのような自然観のもと、地球規模での自然の搾取＝開発が推し進められ、地球環境の危機が引き起こされていることもまた共通の認識となっている。そのような諸結果が近代科学のパラダイムにおけるテクノロジーのひとつの使用の仕方から引き起こされたと言うのであれば、環境倫理的視点の枠組みからの主張と変わらないし、その主張の多くは首肯されうるものであろう。しかしそれが近代性そのものから引き起こされていると主張されるとなれば、その近代性によって生み出された諸結果のすべてが批判に付され、そして破棄されるべきものと見なされてくるのではないか。そこでポストモダンの時代の人間論の構築の必要性がある。

近代性がテロリズム、戦争、暴力など否定的現象を必然的に

引き起こすとなれば、当然、近代民主主義的体制とそれを支える諸価値および自由と平等という根源的権利の思想も超り越えられるべきもの、というよりも「脱構築」されるべきものとなる。そのような視点から、第八章「共生の時代の権利と法」において科学と権利の思想は哲学と法の思想へと転換される必要が主張されるのである。近代性の脱構築は近代科学の脱構築を意味するであろうし、近代的政治体制も非本来的なものと見なされるであろう。それは単に「科学の限界」を指摘するというだけの視点を超えていると言わなければならない。経済的諸価値が否定されるとなれば、近代がもたらした豊かさもまた批判に付され、そして否定されるのではないか。それによって再生されるものが明瞭に指し示されるのでなければ、近代の脱構築の試みは座礁するのではないか。科学的パラダイムから倫理的パラダイムへの転換の可能性がここで根底から問われることになる。近代科学は本当に脱構築されうるのであろうか。その現実的可能性が見出されうるのはどこにおいてなのか。そのことが問われなければならない。「こうしてポストモダンの時代には、テクノロジーが僭主的支配の支配者本人としてその姿を現してくる。かくしてポストモダン人には、科学技術が未曾有の成功を収めた二〇世紀が、何ゆえ無慈悲で残虐な独裁者と群衆を出現させ、苛酷な政治支配と戦争と殺戮の世紀とならなければならなかったのかを問い直すことが、重大な課題として浮かび上がってくる（一一七頁）」。著者の問題意識は明白である。近代性そのものを脱構築しうるポストモダンの人間論の展開であり、それが最終章第九章の主題となっている。

おわりに

「現代世界のグローバル化と普遍同質的国家としての現代の帝国の出現とともに浮かび上がってくる諸問題（Ⅹ頁）」の考察が本書の中心課題にある。「テロリズムの闇と恐怖（ibid.）」がこの「普遍的理念と繋がりあう」ことが指摘される。おそらくこの問題意識は『帝国』の著者A・ネグリや『ホモ・サケル』の著者J・アガンベンのそれと通じるものがある。前者は「マルチチュード」の概念を帝国の対抗軸として呈示し、後者はゾーエに対するビオスの概念を呈示することによって、現代の帝国的世界支配からの脱却と公共性と人間の本来的生の回復を目指している。近代性の究極の地平をフーコーのように生政治ないし生権力として捉え返してみれば、それからの脱却として目指されるものが何であるかは予見可能と思われる。現代科学技術をどのようなものと考えるかによるが、たとえば人間の生殖細胞を操作する技術、クローン技術、安楽死の技術などを想起すれば、その研究自体が自己目的化されようとしている現代科学の知は、核エネルギーのさまざまな利用の思想と重ね合わせてみれば、自らによってその限界を設定することができない人間の欲望と力の行使をかき立てるものであると考えること

に異議を申し立てることは難しいと思われる。本書は、繰り返し語られる「節度・節制・倫理的卓越性としての徳」の回復の意味するところを、もう一度ソクラテスに帰るところから問い直そうとする本来の意味での哲学的試みである。著者の意向に沿って今一度このことを腰を据えて考えてみることが、現代において最も重要なことではないかということを教示してくれる稀有な書であることを最後に申し添えて書評を終えたい。

（まつしま　あきひさ・大阪薬科大学）